大すきいっぱい土の子

～学びづくり、くらしづくり、仲間づくり～

令和５年３月２３日
土井首小学校
文責：校長　江原芳樹
第１５号

「春がまっしろの欠伸（あくび）をする」と詠ったのは、日本近代詩の父と言われた萩原朔太郎です。春の光が、山々を海をくっきりと映し出しながら、その光の強さで全体を白く覆って見えるからでしょうか。

朝から立哨をしていると、木々の芽立ちに目を奪われます。柔らかく新鮮なその緑は、確かに生命の勢いが見えます。それは、どこか子どもたちの姿とも重なり、心躍る自分に気づきます。

春です。別れの春であり、出会いの春です。すべての出会いに感謝しながら、令和４年度のゴールを迎えたいと思います。

凛とした卒業式でした

３月１６日（木）、第７６回卒業証書授与式を行いました。

今年は久しぶりに来賓を招いての卒業式でした。土井首小を旅立つ卒業生の姿を地域の皆様に見ていただくことは、大きな意味があります。土井首小を卒業しても、子どもたちは家庭で、地域で育っていくからです。

卒業式での６年生の姿は立派でした。凛としたその姿には、確かな成長と未来への大きな可能性を感じました。

「立派になったね。これからもっともっと成長できるよ。」という想いで７１名一人ひとりに卒業証書を手渡しました。

コロナ渦の３年間を過ごした６年生は、小学校生活の半分をマスク生活で過ごしたことになります。マスク等の感染対策が緩和され始めた時期ではありましたが、歌を歌うときや呼びかけをするときなどは、マスクを着用しなければなりません。それでも、何とか最後は保護者の皆様に卒業生の晴れの姿をそのまま見てもらいたいと、職員のアイデアで、卒業証書を持った姿を保護者の皆様に見てもらうミニステージを設けました。子どもたちは少し恥ずかしさもあったようですが、卒業証書を手に姿勢を正す子どもたちの姿を誇らしく感じました。

卒業は次へのスタートでもあります。土井首小を旅立った７１名が、さらに自分づくりをすすめ、大いに活躍することを期待しています。

ありがとうございます！

育友会より、テントを一張り提供していただきました。

３月８日（水）、育友会執行部の皆様と新しいテントを建ててみました。この日は汗ばむほどの陽気で、青空が広がっていて、真っ白なテントがひと際鮮やかに見えました。

令和５年度の運動会より、使用させてもらいます。

育友会の皆様、本当にありがとうございました。

《校長室散歩道 R4 版　No.１５》

「子どもが良くなると思えば必ず良くなる、子どもが悪くなると思えば必ず悪くなる」

私が若いころ、師事していた先生から言われた言葉です。この言葉の意味を強く実感したのは教頭として赴任した学校でした。

その学校には、少しのことで感情が高ぶり、物を壊したり、周囲の人に暴力的になったりしていた男の子がいました。感情が高ぶらないようにと次第に周囲の者は距離を置くようになっていきました。

私が赴任した２年目に、新しい先生が担任となりました。この先生は感情が高ぶり変容するその男の子を「この学校で一番困っている子」と捉えました。自分の感情を調整できないのは、苦しく辛いことだと。何よりこの子が誰よりも良くなりたいと強い想いをもっていると言うのです。この先生は特別な手立てをしたわけではありませんが、こうした気持ちでこの男の子と接していきました。次第に激高しても回復する時間が短くなっていきました。感情が高ぶっても、自分で行動を制御できるようにもなりました。

中学生になったある日、男の子から担任だった先生に電話がありました。「もうイライラしなくなったよ。薬も飲まなくてよくなった。」と。

「子どもは必ず良くなる」と周囲の大人の見方が変わると、子どもは素直に伸びていくことができるのです。「子どもは必ず良くなる」と信じる大人でありたいと思います。

２年間で２９号の「大すきいっぱい土の子」を発行してきました。時折、「校長散歩道」に対する感想をいただくことがあり、読み手がいる喜びを感じていました。共有したい話題を一方的に発信していただけの感はありますが、お付き合いいただき感謝しています。

土井首小の地域力を感じた２年間でした。子どもは、家庭だけで、学校だけで育っているのではないことを実感しました。家庭、学校、地域が伸びていこうとする子どもたちの礎となることの意味を強く感じたものです。お世話になりました。ありがとうございます。